

Allegory
Of
Color

しきさいの
ぐうい
色彩の寓意

ーゲーテの遺産

正道

SEIDOU

II

目次

色彩の寓意Ⅱ

全体の目次	3
-------	---

第5章 赤と緑（座標5）

（1）ヘモグロビンと葉緑体と鉄	5
（2）相補関係の例	7
（3）政治家と芸術家	10
（4）赤と緑のまとめ	12

第6章 黄（座標8）

（1）内面から外部へ	15
（2）骨の役割	18
（3）黄色と紫の確執	20

第7章 黄色から紫への相転移

（1）天才への無理解から受容へ	23
（2）黄色から紫への相転移	25
（3）相転移がつくる歴史	26

第8章 白（座標9）

（1）総合された色彩	30
（2）補色関係に対する精神的賦与Ⅰ	32
（3）補色関係に対する精神的賦与Ⅱ	34

(4) 白そのものの特性	36
--------------	----

第9章 紫族のための宗教

(1) 紫族の判断力	39
------------	----

(2) 黄色から始まる宗教史	40
----------------	----

おわりに

白と黒をこえて	44
---------	----

色彩の寓意Ⅱ

全体の目次

序章 色彩は何を語るか

第1章 黒（座標1）

第2章 膨張色と収縮色

第3章 紫（座標2）

第4章 異質なものの平等性

第5章 赤と緑（座標5）

第6章 黄（座標8）

第7章 黄色から紫への相転移

第8章 白（座標9）

第9章 紫族のための宗教

おわりに

第5章 赤と緑（座標5）

（１）ヘモグロビンと葉緑体と鉄

葉緑体の緑

まずは緑から語りたい。そうしてみると、緑と言って、ほとんどの人が最初に思いつくのは、木々や草花の緑ではないだろうか。

たしかにその緑は、私たちにとって身近なものだ。室内には観葉植物があり、庭には花壇があり、窓から見た景色には木立が生い茂っている。それらの全てに緑という色が含まれている。

そして科学的に言えば、これらの植物の「緑」の基になっているのが、葉緑体という成分である。イメージ的に言い表せば、それは、ごくごく小さな緑色の粒だと言っているだろう。

この葉緑体は、光合成によって酸素をつくり出す。もう少し詳しく言うと、光エネルギーと二酸化炭素を材料にして、糖と酸素とを生成する。

もともと地球上には、今あるような「酸素を含む大気」はなかった。

それが二三億年ほど前に、シアノバクテリアという生命体が生まれたことによって、はじめて酸素の造成が始まったのである。このシアノバクテリアは、葉緑体の御先祖さまのような生き物だ。

浅い海を舞台にして、その酸素造成は何億年も続いた。今でもストロマトライト（シアノバクテリアが作った層構造）の化石として、この造成の記録を、私たちは、直接目で見ることができる。

ついでに言うと、オーストラリアのハメルンプールという海岸では、今なお「生きているストロマトライト」を見ることが出来る。

そして、その地道で気長な造成活動により、ついに地球は、酸素成分に富んだ惑星になった。そればかりではない。その酸素を使って活動する生物たちが繁栄を謳歌する「生命の惑星」にもなったのだった。

ヘモグロビンの赤

むろん「生命の惑星」と言ったときの「生命」には、動物も含まれる。すなわち植物に遅れること二十億年後、地球上に「動物」が登場したのである。この動物という生命体は、酸素を活動エネルギーに変えて、自由に動きまわることができた。

そして、その中でも、より高度に進化した動物である「脊椎動物」に共通して見られるのが、赤い色の血液である。

そのように血液を赤くしているのが「ヘモグロビン」という成分だ。そして、このヘモグロビンが、肺胞で取り込まれた酸素を、大小の血管を通して、体のすみずみまで運んでいってくれる。

こうして運搬された酸素が、細胞内でエネルギーに変換される。そうして私たち脊椎動物は、はじめ

て、自分の体を動かすことが出来るようになるのである。

だが、これで全てが完結するというわけではない。私たちは、生命活動を続けるために、二酸化炭素を、口や鼻から吐くことになるからだ。誰でも知っている通り、吸ったぶんを吐き出して、ようやく私たちの「一回分の呼吸」は完結するのである。

そして、この二酸化炭素は大気中を漂って、やがて植物に吸収されることになる。これは要するに、植物に対し、彼らの営為（光合成）の「材料」を提供したということだ。

つまり、植物が私たちに酸素を恵んでくれるように、私たち動物のほうも、二酸化炭素という恵みを、植物に与えているのである。

これはまさに、どちらが欠けても、成立することのない相補関係と言えよう。またここには、赤と緑に象徴される、見事なまでの平等性が現れているとも言える。

共通する鉄という要素

そして、ヘモグロビンと葉緑体には、物理的な共通項もある。それは両者とも、その構造を成立させるために「鉄」を必要とするということだ。

まずヘモグロビンだが、これは鉄とタンパク質で構成されている。貧血を防止するために、よく「ほうれん草を食べなさい」とか「レバーを食べなさい」と言われるが、これはひとえに、ヘモグロビンを構成する鉄分を補うためである。

そして、葉緑体の生成にもまた、鉄が不可欠なのである。これは割と最近分かったことなのだが、鉄分が不足すると、光合成の作業が妨げられてしまうのだ。

ここからは単なる私の想像であるが、この鉄が、ヘモグロビンと葉緑体の価値を等しくする、主たる要因なのかなと思うたりもする。つまり鉄こそが、ヘモグロビンと葉緑体の「明度」を同一にした「共通項」なのではないかと思うのである。

座標5というステージ

何といっても鉄は「実用性」という面で、それ以上のものがないぐらい優れた金属である。

人類文明の主たる材料は、この鉄なのだと言ってもいい。少なくとも、現代におけるインフラストラクチャー（施設、設備など）の材料面では、確実にそうであると言えるだろう。鉄筋コンクリートを抜きにして、現代における大規模建造物は、まず語れないだろうからだ。

たしかに鉄よりも珍重されている金属はある。金、プラチナ、銀、銅などだ。しかし、採掘量や使い勝手のよさ、汎用性において、鉄に勝る金属は絶対はない。

まことにそうである。金や銀は、その美しさによって、人の心を豊かにしてくれるが、鉄はその実用性によって、私たちの日常生活を豊かにしてくれるのである。

そして、この鉄の実用的恩恵に、生物体であるところの、私たち動物や植物たちもまた、大いに依存しているということだ。先述したとおり、鉄が、ヘモグロビンと葉緑体を構成する一翼を担っているという点で。

じつは私は、ルベドが金を、アルベドが銀を「シンボル物質」とするならば——自我の確立段階は「鉄」をシンボル物質とするのが、最も相応しいのではないかと考えている。合理性が自我の特質の一つであることは、今さら言うまでもないが、合理性はまた、生活上の実用性を求めるものだからである。

ちなみに混在の一のシンボル物質は、もちろん「黒土」か「泥」が相応しい。

加えて、その起源にまで目を向けるならば、かかる鉄は、超新星爆発によって生成された元素である。そして、この宇宙的大爆発が起こる頻度は、中性子星合体（金の生成）などと比べれば、はるかに——というよりは、比べ物にならないほど多い。

それだからこそ鉄は、量的な優位性にも事欠かないのである。そして、この大量生産が、私たちの合理的な文明（＝近代的自我による機械文明に相応しいだけのインフラ）を支えているのである。

これが真実に則った考察であるとすれば、座標5において、赤と緑を論じたことは、まことに「場に見合った話」となるだろう。

（2）相補関係の例

ダークグリーン

ところで私には、この「植物と動物の相補関係」「緑と赤の補色関係」のことを考えると、どうしても連想的に思い出してしまう漫画がある。それが佐々木淳子氏による名作漫画『ダークグリーン』である。

この漫画の基本設定は、私たち動物の進化と行動理念を操っているのが、植物の深層意識（ダークグリーン）だということである。

私たちは普段、植物などは、何の意識も持たない低次の生き物であると思っている。しかし、その実、植物の集合的無意識こそが、私たちにとっての「神」であるというのだ。つまり私たちは、気づかぬうちに、植物たちの掌の上で踊らされているということになる。

しかし一方では、動物（人間）には、現実世界のなかで、植物を育てて繁茂させる能力も、植物を枯らして滅ぼす能力も備わっている。つまり私たちが、植物たちの生存に、匕首を突きつけているということだ。ゆえにここには、一種の相補関係が現れていると言えるだろう。

そして、これが『ダークグリーン』が主張する世界観なのである。

赤と緑の架け橋

むろん『ダークグリーン』の設定がそのまま現実であると言う気はない。

だが、動物と植物の進化が、不思議と足並みを揃えているのは事実である。藻類は両生類に、裸子植物は爬虫類（恐竜）に、被子植物は哺乳類に対応しているように見えるからだ。

被子植物は花をつけるが、この花を見て、それを美しいと思う感受性を持っているのは、おそらく哺乳類、なかんずく霊長類だけだろう。

後述するように、人間の女性や芸術家は、ある意味で「植物的な心性」を持っている。他方、植物のなかでも「花」というものは、おそらく動物（人間）に寄り添った存在様式を持っている。

これを簡単に言えば、女性とは植物的な人間であり、花は動物的な植物であるということだ。私はここに「赤と緑の相補的な架け橋」「動物と植物の相補的な架け橋」が隠されているような気がして仕方がないのである。

再び『ダークグリーン』に戻るが、この漫画の著者が、純度の高いインスピレーション（アルベド侵入）を受けて作品づくりをしているのは疑いない。私の霊的な感性は、それが真実であることを確信してしまっている。

そして、そのアルベド侵入の内容は、何よりも「赤と緑の相補性」を教えるものだったのだ。

そしてそれが、この『色彩の寓意』執筆における、最初の創作的ヒントになった。この点に関して私は、佐々木氏と、彼女にアルベド侵入を与えてくれた天意に、大いなる感謝を送らずにられない。

火成論と水成論

ここで話を変えよう。

科学のあけぼのの時代、古代ギリシアのイオニアという地方で、多くの自然哲学者たちが輩出された。自然哲学者といっても、本質的には彼らは、哲学者よりも科学者に近い人たちである。

その中の一人であるタレスは「万物の根源は水である」と説いた。これを「水成論」という。その一方で、アナクサゴラスという自然哲学者は「万物の根源は火である」と説いた。こちらの主張は「火成論」と呼ばれている。

二人は同時代人ではないので、直接的に議論を戦わせたわけではない。しかし十八世紀になって、この二つの意見のどちらが正しいのか、それについての議論が盛んになった。

十八世紀人であり『色彩論』の著者でもあるゲーテなどは、タレスの意見に与していたようだ。

それが分かるのは、彼の代表作である『ファウスト』には、まさに「タレスとアナクサゴラスの討論場面」が描かれているからである。

といって、そこでゲーテが、明確な意思表示をしているという訳ではない。つまりゲーテは、そこで「水成論こそ正しい」と断言しているわけではない。しかしながら、明らかにその場面（第三幕）の情景には、海の豊麗さと生命への賛歌が満ち溢れているのである。

赤と緑の物語

ところで色彩論的にいえば、火は赤、水は緑にあたるだろう。生命を包摂した水は、青というよりは緑色であるからだ。

そして私は、ここで赤と緑の相補関係について語っている。したがって「火成論が正しい」とか「水成論が正しい」といった単純な割り切りをする気は毛頭ない。

むしろ私が主張したいのは「火成論も水成論ともに正しく、これら二つは、見事なまでに互いを補い合っている」ということなのである。

その相補関係を納得していただくため、試みに問題の「根源」まで遡って、話をスタートさせてみよう。すなわち私は、ビッグバンより以前の世界から、この経緯を書き起こそうと思っているのだ。

といっても、実地で確認できる訳ではないから、ビッグバン以前の世界については、これを混沌とした静寂とでも考えるほかはない。ただそれは、イメージ的には、おそらく水の性質を持っているのではないかと思うのである。

そして「インフレーション」から「ビッグバン」までのくだりに関しては、やはり火成論が、そのイメージどおりの働きを為したはずだ。つまり宇宙規模の「火薬の爆発」として。もっとも、このときの爆発的な膨張宇宙が、じつは液体的なものだったという話もあったりするのだが……

そして、宇宙が拡張して温度が下がるにつれ、宇宙は、星たちが明滅する、大海原のような景観を呈すようになる。この情景を眺めれば、水成論者たちは当然、万全の自信をもって「これこそ根源的な水である」と断言するだろう。

さらなる経過

しかし明滅する星そのものを眺めれば、それは火そのものと言える。恒星の核融合反応によって、そこには熱と明るさが満ち溢れているからだ。

それに、惑星である地球だって、その始まりを見れば、明らかに火の玉であったはずだ。私たちの故郷の始原は、まさしくアナクサゴラスが言うような「火の世界」だったわけである。

しかし、これもまた億年の時間を経ることによって鎮静化していく。つまり温度が下がって雨が降り、ついには海さえもが誕生することになる。

しかも、この海には緑色の生物（シアノバクテリア）が生まれて、地球全体に酸素を満たすことになる。これなどは、まさにタレスが提唱した「根源的な水の世界」なのではないだろうか。

そして、次には、その酸素をエネルギー源にする動物たちが登場する。光合成に対する補償として「二酸化炭素を吐く、赤い血潮をもった生き物」が姿を見せるようになったのである。そうした動物たちのエネルギーを生きたまは、その内に秘めた「火」を想像させるものがある。

——こうしてみると、やはり「赤と緑」「火成と水成」は、どちらか一方のみが、恒常的に優位に立っている、という訳ではないことが分かる。つまり、その時期その時期によって「優勢と劣勢のバランス」

を大きく変えているのである。

そうして両者は「赤と緑」「火成と水成」をサンドイッチ状に重ねながら、気が遠くなるほど長い「相補関係の歴史」を作ってきたのである。

（3）政治家と芸術家

赤と緑のイメージ

赤という色のイメージには、集中、エネルギー、正義、活動性、といったものが含まれる。そして、こういったイメージを人間に当てはめると、男性、政治家、軍人といった類型が現れてくる。

対する緑という色のイメージには、広漠、美、平和、静穏、といったものがある。こういったイメージを人間に当てはめると、女性、芸術家、思想家、母親といった類型が現れてくる。

そのように美や芸術家、そして女性までもが緑に属するとなると、男性が芸術家となると、しばしば彼に「女性化」の傾向が生じるのは致し方あるまい。

それこそレオナルドやミケランジェロの男性愛好は有名だし、ヴェルレーヌとランボーという、男性詩人どうしの恋愛関係も有名だ。こうした例は、探す労さえ惜しまなければ、本当に芸術史上に事欠かないものである。

芸術的宗教家を自認する私自身、男性経験こそ持っていないが、一般男性よりは女性的であることを自覚している。もしかしたら、いつか男性に恋愛感情を持つこともあるのかもしれない。今のところ想像もつかないことだが、そうしたポテンシャルは、内心に確かにあるように思われる。

だが、より正確には私の場合——特殊例かもしれないが——いまや「自分の中の女性性」と共生している感が強い。そして、その自足状態によって「外部の女性と直接つながりたい」という衝動が薄弱になっている気がするのである。

これに対して、政治活動や軍事活動に邁進する男性は、まるで自分に欠けているものを埋めるかのように、女性に依存し、女性を獲得することに目の色を変える。いわゆる「英雄、色を好む」というやつである。

軍人と芸術家

ただしこれは、べつに直接的な「女性」でなくともよい。

むしろ偉大な政治家、軍人は、肉体としての女性よりも、より抽象的で高尚な女性性を教えてくれる、

芸術家とか思想家を求めるようにも見える。

それについて考えると、哲学者アリストテレスを師としたアレクサンドロス大王や、文豪ゲーテのファンであったナポレオンなどが、すぐに思い出される。

アレクサンドロスの場合、彼とアリストテレスを引き合わせたのは父親（フィリッポス）だったが、師と弟子の関係は非常に良好だったようだ。

つまりここには「政治、軍略家」と「芸術、思想家」との相補関係があるということだ。私はこれを、旧著（パプーでは現在配信していない）において、

「政治も芸術の一種であり、一般的な芸術が、芸術を外側から眺めるスタイルを持っているのに対して、政治は芸術を、内部において生きる、というスタイルを持っている」という風に表現している。

星と星座

前項で述べたことを言い換えれば、芸術家や思想家は星座であり、政治家や軍略家は星だということである。

仮に星が人格を持っていたとしよう。そうしてみると、星は、星座表を見ながら、ある星座を成立させるために、自分がどここの位置で、どれほどの明るさを見ればよいかを決定し、その実現のための行動をおこす。

逆に星座は、すでに複数の星々と調和的に並んでいるので、それ以上に動く必要はない。よって静的にならざるを得ないが、一方の星は、その静的なものを目指して、活発に動くことになるのである。

要するに、政治家や軍略家にとって、芸術家や思想家は、活動の羅針盤であり地図なのである。

そして、そうであれば、芸術家や思想家は、政治家や軍略家の活動によって「自分という地図」が現世においてリアライズするのを——ときには予感のうちに——感じずにはいられない。

それだから芸術家や思想家は、そのリアライゼーションが、なるべく地図とおりになるよう——政治家たちにメッセージを送って、彼らをひそかに誘導しようとするのである。

もっとも、そのメッセージの出どころは、決して芸術家や思想家の自我ではない。

そうではなく、もっと普遍的な彼らの無意識領域（深層意識）こそが、その本当の出どころなのである。

むしろ、そこから生じたメッセージを、政治家や軍略家に「媒介すること」こそが、芸術家や思想家たちの真の役割なのかもしれない。

（4）赤と緑のまとめ

男性性と女性性

こうして見てくると、赤と緑のアレゴリーとしての男と女、政治家と芸術家といった対比には、各々の立場において、その存在様式の徹底性に、差異と漸次性があるように思われてくる。

これは、なかなか伝えるのが難しいテーマなのであるが、それでも出来るかぎり丁寧に話をしていくことにしよう。

まず赤について。もともと純粋に赤の性質を反映しているのが、政治的、軍事的な男性である。彼は「赤のアレゴリー」として徹底された存在となっている。

その次に、中間的な立場として、芸術的な男性と、政治家的な女性が現れる。この二つの立場は、おそらく「存在様式の徹底性」において等価のものであろう。

そして、緑色の純粋種として、芸術的な女性がいる。これが人間のなかでは、緑のアレゴリーとして最も徹底されている存在である。

ただし、この芸術的な女性というのが、必ずしも職業芸術家（ディレタントを含めて）である必要はない。

むしろ、社会的に頭角を現すほどの芸術家、あるいは、人にその存在を周知されるような芸術家になっている場合——そこでは男性的な、ある種政治的な駆け引きが行われている可能性が高い。

よって、その緑色のベースカラー（＝女性であること）に、若干の赤色が混ざってしまうのである。反対に、純粋な緑のアレゴリーとしての「芸術的な女性」には、一片の自己顕示欲もないと言えよう。つまり彼女の場合は、その生き方自体が芸術的なものであって、ことさら「芸術家であろう」と努力する必要は全くないのである。まるで自然そのものであるかのように、彼女は「完全なる無意図のうちに」美を体現しながら生きているのである。

このような女性こそは、男たちにとっての「静寂の星座」であり、彼女は、その静けさのうちに、底の底まで芸術的真理を開示するのである。

平等の真理を語る二色

二つの色を同時に論じただけに、本章は、ちょっと尺が長くなってしまった。そこでここで、振り返りとまとめを行っておこうと思う。

これまで赤と緑の相補関係について語ってきた。

そのなかで最も重要なのは、やはり、この赤と緑が、どちらが優れているとも、どちらが偉いとも言

えないこと。そして、そのどちらもが素晴らしい価値を持っていて、お互いが、同じぐらい相手が必要としているということである。

世界には——赤と緑のアレゴリーに基づいた——こうした「平等な相補関係」が確かに存在する。個性の異なった複数者による、契約思想にも似た相補関係が存在するのである。

これは私たちに、あらためて男女平等や、人間平等の思想を示唆してくれる、まことに重要な視点である。

そういう訳であるから、私たちは折に触れて、科学的に構想された色彩論の精華であるPCCSを眺め、さらに現実のなかで、動物の血脈や木立の葉を眺めるべきである。そのとき私たちは、科学と大自然をつらぬく「平等の真理」を知ることになるだろう。

第6章 黄（座標8）

（1）内面から外部へ

黄色と紫の対称性

またここでPCCSの色相環を見ていただきたい。すると環の中心を挟んで、黄色と紫が正反対の位置にあることが分かるだろう。

つまり黄色は、紫の対称点にあたる。そして、赤と緑が「水平の対称」であるのに対して、黄色と紫は「垂直の対称」を描くことになる。

PROCESS PHASE



どうしてそうなるか。それは、赤と緑の場合は、その明度が同一であるのに対して、黄色と紫の場合は、その明度に大きな差異があるからだ。すなわち純色の状態にあるとき、紫は暗く、黄色は明るいのである。

そのように明るい黄色は、膨張色の代表格である。すなわち持ち前の膨張効果によって、黄色い平面を、実物よりも大きく見せるということだ。紫は収縮色であったが、黄色は、それとは全く反対の特性を持っているのである。

たとえば同じ人が紫の服を着ていたら、実際よりも小さく見えるだろうが、黄色い服を着ていたら、実際よりも大きく見える。

このように言うと、女性はあまり黄色の服を着たがらないかもしれない。

しかし、黄色は本当に美しい色だ。だから、そのように即物的な見方はしないで、むしろ黄色の服を着ると、それにより明るくて華やかなオーラが、周りにパッと拡がると考えればいい。それはそれで、一つの人間の魅力となるだろう。

そして、このような事が起こるのは、根本的に黄色が「内側から外側へ」というベクトルを持っているからである。この性質のゆえに、黄色は膨張色とか拡張色と言われるのである。

黄色族の自己認識

ここからは、色の性質を、人間の性状にインストールした場合の話をしていこう。かつて紫色の性質を帯びた人々を、端的に「紫族」と呼んだようにだ。

そうしてみると、かねてより紫という色は「外部から内側へ」というベクトルを持っていたはずである。そのため紫族の人たちは、自分の外部にあるものを感覚して、それを内的な自己認識の材料としていた。つまり彼らは、物質的な財産や、客観的な肩書きによって「それらを持っているのが私という存在である」という自己規定をしていたのである。

そこにどれほどの真実性があるのかは知らない。が、ともかく人間は、つねに「自分とは何者か」という規定をしておかないと、何ともいえず不安に駆られる生き物であるらしい。

そのため紫族の人々は、つねに自分の外面をチェックしては「自分とは何者か」を規定しようとする。そして、少しでも自分を「いいもの」として認識するために、先に述べたような、物質的な財産や、客観的な肩書きを追い求めるのである。

あるいは紫族は、周囲（外部）の人々が「良い」と評価するものなら、何でも手に入れようとする。彼らが流行を追い求めるのも、その端的な現れだと言えるだろう。

黄色族の外殻感覚

そうした紫族に対して、黄色族の人々は、自己規定をするために「外部的な要因」をほとんど必要と

しない。もっと正確に言えば、第二義的にしか、これが必要としない。

もちろん、全く外部的なものが必要としない訳ではない。けれども、紫族の人々が、まるで甲殻類のように分厚い殻（＝外側重視の象徴）を心中に持っているのに対して、黄色族の人々は、哺乳類の皮膚程度の「殻」しか持っていないのである。

つまり黄色族にあっては、殻は皮になってしまったのだ。そして私は、今その皮の「厚み」について話をしてるのである。

じっさい黄色族にとっては、外部的な財産や肩書きなどは、ほんの0、1ミリぐらいの重要性しか持っていない。もちろんこの0、1ミリというのは、人間の皮膚の厚さと被せて言っているものだ。

ところで——すでに気にかかっている読者もいるだろうが——私は紫に関しては「紫族」と呼んでいるのに、黄に関しては「黄族」と呼ばずに「黄色族」と呼んでいる。

まあ、さほど重要な話でもないのだが、これは「黄族」という響きが、どうしても「貴族」を連想させるから、そのようにしたのである。それよりかは「黄色族」と呼んだほうが無用な誤解を生まないだろう、と。

もっとも、皮肉なことに、金持ちとか貴族とかは、むしろ紫族のうちにこそ多くいる。となれば「黄族＝貴族」という錯覚は、なおのこと読者に益をもたらさないことだろう。

（2）骨の役割

支柱としての骨

黄色族を象徴するのは脊椎動物——とりわけ哺乳類——である。

脊椎とは背骨を構成する骨のことであり、よって、この脊椎が集まって、脊椎動物の体を支えているということになる。

既述したとおり、甲殻類や昆虫は、その体を支えるために外殻を持っている。それに対応するように、脊椎動物は、自身の体を支えるために背骨を持つのである。

もっとも、甲殻類や昆虫だって、体内が空洞になっている訳ではない。そこには、生命保持に必要なぶんだけの、腱やら内臓やらが入っている。

とはいえ、それらの器官は、外殻のそれと比べると、非常にしろいものだと言わざるを得ない。とても体を支えられるような代物にはなっていない。

それに比べれば、哺乳類の骨など、ほとんど石のようにも感じられる。それぐらいに丈夫なのだ。ほとんどの場合において、甲殻類の殻よりもさらに固い。これを砕こうと思ったら、それは文字どおりに「骨が折れる仕事」となるだろう。

体内の海としての骨

しかも骨は、ただ体を支えるだけが役割ではない。赤血球や白血球を作るのもまた骨の役割である。また骨からは、カルシウム等のミネラルが沁みだしている。

そのミネラルが体中を巡ることによって、哺乳類の体は「海由来の生物」としての健康を保つことが出来る。

この「海由来の生物」とはどういうことか。

もともと海で息づいた脊椎動物は、やがて海から陸へと進出するようになった。つまり魚類から両生類への進化である。

しかし海中で生きていた時代の脊椎動物には「その海の中でしか摂取できない必須ミネラル」というものがあつた。それは生物の体にとり「これがないと生きられない」というぐらいに重大な栄養素だつた。そうであるのに——そのような必需品が海にあるのに——にも関わらず、彼らは進んで、海から離れてしまったのである。

いまや陸上に生活の場をシフトさせてしまった「海由来の脊椎動物」であるが、では彼らは、上述の必須ミネラルを、どうやって「陸上」で調達すればいいのだろうか。

ここで様々な、進化上の試行錯誤があつたのは間違いないだろう。

だが、まことに驚くべきことに、生命はこの過程で、海水中に漂っていた必須ミネラルを、自分の体の中に集約、貯蔵することを覚えた。つまり体内にストックヤード（保管場所）をつくつたのだ。そして、そのストックヤードこそが「骨」なのである。

この貯蔵庫としての骨は、陸上生物の必要に応じて、自己内のミネラルを小出しにしてゆく。つまり私たちは、言うなれば「濃縮還元スタイルにより」体内で疑似海水を生産しているのである。

荒っぽい説明になるが、海水を濃縮して骨をつくり、その骨を薄めて海水を作る、たとえばイメージがしやすいだろう。海由来の生物である私たちが、陸上で生きていられるのは、体内で、こうした濃縮還元のシステムが確立しているからなのである。

目に見えない支え

体の芯にある「骨」という支柱からミネラルが発出し、それが体中を充たしていく——という流れからも分かるように、私たち哺乳類（陸上で生きる脊椎動物）の体には「内部から外側へ」というベクトルが存在している。

そして、この「骨」という動物内部の重要部分は、外部からはほとんど見えない。見えるとしたら歯ぐらいのものだ。それ以外の骨は、死んだときに茶毘にふすか、生きて大怪我でも負わないかぎり露出し
ない。

これは、甲殻類や昆虫の外殻が、どこをほじくるまでもなく、そのまま目に見えるのと、際だった対照を描いていると言えよう。

そして、そのほとんど目に見えないもの（骨）を支えにして「内側から外側へ」というベクトルに沿った生き方をするのが、黄色族である。

周囲の評価や、目に見えるものにしか関心を寄せない紫族にとっては、黄色族のライフスタイルは、永遠の謎であろう。

そして、現実の世界における、その「目に見えないもの」とは、ようするに形而上的なものである。具体的に言えば、神、霊、宗教的真理といったものだ。これらは、もちろん感覚器としての目には映らない。

けれども黄色族は、これらのものを心の支えにし、かつこれらのものを、この世に表出するために誠心誠意で努力する。まさに内から外へ、と。

読者にあつては、古代イスラエルの預言者たちを思い出してほしい。エリヤもエレミヤも、確かにそのような生き方をしていたはずだ。

そういえば、見えないはずの骨の中で、それでも齒だけは露出しているのは「たまには形而上的な奇跡が起こることもある」ということの暗示かもしれない。

（3）黄色と紫の確執

既成宗教は紫的

もっとも、すでに既成宗教のドグマとして認知されている宗教的真理などは、社会的にはもう「目に見えるもの」である。

したがって、そのドグマのために生きることが、あまり黄色族の生き方とは重なり合わない。むしろ多くの場合、それを「紫族の生き方」として見たほうが、より現実に見合ったものとなる。

これとは逆に、実際に黄色族が「自身の支え」とするのは、いまだ社会的に認知されていない、ただ彼だけが感知するばかりの宗教的真理なのである。彼はそれをして「守護霊、聖霊、神霊、ダイモン、パラクレート」などと呼ぶかもしれない。

しかしながら私たちは、その名称として最も相応しい言葉を知っている。それこそ「アルベド侵入」である。

このアルベド侵入は、疑いようもなく、それを与える主体が、誰の目にも映らないものである。これを受ける人間も、ただそれを「感じる」だけである。

それでも——目に見えないながらも——「それ」は確かに黄色族の主体にインスピレーションを与え、彼を「天才」に仕立て上げる。

そして、その天才性によって、黄色族の主体は「個人から大衆へ」「内面から外側へ」と、膨張的に、

その影響を波及していくのである。

紫族にとっての謎

紫族にとっては、黄色族の行動指針が、何としても奇妙なものとして見えるだろう。

どうしても目に見えないもののために忠心を尽くせるのか。どうしても物質的確証のないものを信じることが出来るのか。どうしても神や仏のために、自分を犠牲にすることが出来るのか——等々、紫族にとっては、黄色族が為すこと全てが謎そのものである。下手をすれば、黄色族の善は、紫族にはみな偽善に見えてしまうだろう。

さりながら黄色族にとっては——見えないながらも、骨が確かに自分の体を支えているように——目に見えない「霊的な高次存在」が実在することは、当然のうえにも当然な「現実」なのである。

私にしてみても、聖霊がこの身に与えてくれる助力については、誰に何と言われようとも「現実」としてしか認識することが出来ない。

これは霊的な「感覚的眞実」である。よって、反論や反対に何万言を費やされようとも、それを受け付けることが出来ないのである。

そして、黄色族の内面で生じたインスピレーションは、その内容が世に広まることを、まさに宿命的に望むことになる。黄色は膨張するのが宿命の色だからだ。

黄色い眞実は、決して、それが受容者ひとりの所有になることを許さない。そうであるために、ここから自然と「執筆」「布教」「出版」といった啓蒙運動が始まることになる。

そしてそれは、眞実に「内面世界からの強制」によって行われるものである。断じて、自己顕示欲による恣意的行いなどではない。

とはいえ、こんなことを言ったところで、これが紫族によって理解されることはないだろう。彼らにとって「目に見えないこと」は、それが無いことに等しいからである。残念ながら、それが彼らの現実であるのだ。

第7章

黄色から紫への相転移

（1）天才への無理解から受容へ

天才に対する無理解

端的に言ってしまうと、黄色族に属する人たちは「天才」である。

他方、紫族には天才が存在しない。なぜなら基本的に、紫族の感受性や思想は、本物の天才の存在を許さないものだからである。

むしろ紫族による唯物史観、あるいは歴史無価値論は、歴史上の天才を「偶然の幸運に見舞われただけの凡人」に貶めてきた。そして、そのような姿勢が、彼らの「天才の偉業に対する感受性」を、すっかりインポテンツ化してしまったのだ。

そういうこともあって、つねに紫族は、天才の偉業を理解しようとしないう。天才が自分と同時代に存在している事実などは、なおさら認めようとしないう。

だが、そうであったとしても、黄色族の働きは、結局は社会のシステムを更新してしまう。往々にして、赤族や緑族が、その更新の手伝いをするからだ。この「手伝い」については、第9章でしっかりと触れることになる。

してみると、たとえばイエスなどは、明らかにそれまでの——紫化していた——ユダヤ社会のアンチテーゼであった。

そのため民衆（紫族）によって、自身が殺害されるほどの誤解、抵抗を受けるしかなかった。それは誰もが知る、歴史的事実である。

それでもイエスの死後、多くのクリスチャンによって、地中海世界は次第に変貌していった。つまりキリスト教化していったのだった。

そして、コンスタンティヌス帝のミラノ勅令（信教の自由）と、テオドシウス帝によるキリストの国教化によって、ローマ世界、ひいてはヨーロッパ世界は「キリスト教世界」となったのである。

既成化した世界で

このように、地中海世界のキリスト教化はもともと、黄色族の天才性が引き起こした変化ではあった（ただしイエス自身は、精確には、黄色よりも明度が高い「白族Ⅱアルペド族」の人間であるが、そこは深入りしないでおこう）。

しかし、そのキリスト教化という歴史的变化が、やがて社会的に馴化し、既成事実化されると、その既製品化した世界は、今度は紫族の活動エリアとなる。

たとえば、かつて黄色族が起こした「合理性を超えた宗教的奇跡」は、いまや「非合理的な宗教的儀

式」へと成り代わる。

そうなって当然だ。奇跡は霊的感受性がないと認識できないが、儀式は紫族の目にも見えるからである。そのため儀式は、紫族にも容易に受容されることになる。

奇跡はまた、非合理的な教義（ドグマ）へも変化する。

たとえばイエスが発揮した「霊的な母性による許し」は、紫族のもとでは「処女聖母信仰」となる。そして、この非合理的な存在を信じなければ、キリスト教世界における異端になってしまう。

そのほかにも、中世になると、さまざまな儀式やドグマが、数多く教会内で誕生することになった。そしていつしか、その非合理的な儀式やドグマが、窮屈なぐらいに、クリスチャンの生活を縛りつけるようになった。

紫族の安寧

ところがある。そのような「窮屈で非合理的な生活の枠づくり」を、紫族の人々は、なぜか割合に好ましく思うのだ。

というのも「非合理的だけれども、皆がやっていること」としての儀式は、それを自分自身でも真似すれば、彼にとり「その集団に、固く帰属していること」の証明書となるからだ。

一方、仮に誰かが合理的な行動をとったとしても、その行動は、彼が「ある集団に帰属している証拠」にはなりえない。合理的で良識的な行動というものは、結局コスモポリタニズム（世界市民主義）の現れでしかないからだ。

それとは真逆の、非合理的行動の模倣による集団への帰依——それは、まるで母親に抱かれているかのような所属感を、確かな手ごたえとして彼に与えてくれる。それだからこそ、これが紫族の人々を憩わせて、心底から彼らを安寧させるのである。

いや、そもそも彼らには、共同体が行っていることを模倣する（＝同一化）以外の、孤独の癒し方など分らないのである。

よって、聖体拝領を受けるクリスチャン、線香を上げる仏教徒、日に何度も跪くムスリムなどは、まさに典型的な紫族の姿を伝えるものであると言えるだろう。

とはいえ現代においては、マルクス教的な唯物論的主張を、周囲と共有している人々こそが、最も紫族的であると言えそうではあるけれども。

（2）黄色から紫への相転移

共通項が下支えする正反対

ところで、正反対なもの同士というのは、不思議なことに、多くの共通点を持つものである。このように言くと、難解なパラドクスの呈示のようにしか聞こえないかもしれない。

しかしアメーバと電話を並べて正反対と言う人はいないし、猿とかまぼこを並べて正反対だと思ふ人もいない。こうしたカオス的な比較には「両者が同じ土俵に乗っている」という感じがまるでないからだ。むしろ私たちが「正反対」というものを感じるためには、善人と悪人を並べたり、男と女を並べたほうがよい。そのほうが、よっぽど納得がいく。

この場合の共通項は「人間」であるが、そこには、両者を結びつける要素（共通項）がステルスチックに布置されているのである。

つまり比較対象に、秘められた「何らかの共通項」があってこそ、私たちは物事の「正反対」を認識することが出来るわけなのだ。

たとえば、さきのアメーバならば「生命体」の共通項を用意して、複雑な多細胞生物を対置させたならば、私たちはそこに「正反対」を感じる事が出来る。

電話ならば「コミュニケーション」の共通項を用意して、ゼスチャーを対置させたならば、私たちはそこに「正反対」を感じることが出来るだろう。

正反対への相転移

このように、私たちが認識している「正反対」には、実は確固とした「共通項」が秘められているのである。そしてさらに興味深いことには、

「この共通項を媒介にして、ある概念が、その正反対の概念へと転移（反転）してしまう」ということがあるのである。

そういう事実の例を一つ挙げておこう。それが「水」である。この水が、蒸気になったり氷になったり現象を、科学的に「相転移」という。

蒸気と氷は、現象としてまさに正反対のもののだが、ここでもH₂Oという分子式は、いずれの相でも変わらずに保存されている。つまりそこに、蒸気と氷という真逆なものの「共通項」があるということだ。であれば、共通項を媒介にした反転現象を、ここで「相転移」という言葉によって表現しても不都合はあるまい。

そしてユングなどは、非常に多くの物事が、極端から極端へと転換するものだと考えていた。これを

エナンティオドロミーと言うが、ここで私が主張したいと思っていることも、それと同じかもしれない。ときに黄色と紫は「PCCSの垂直軸で結ばれている」という共通項を持っている。そして、この共通項を介して、黄色の概念が、紫の領域へと反転し、相転移してしまうことがあるのである。このような事例は、存外なほどしばしば起こる。

(3) 相転移がつくる歴史

カリスマから伝統への相転移

そうしてみると、先述の「イエスの奇跡が、キリスト教社会の儀式やドグマになった」という話は「黄色から紫色への相転移」と言うべきものである。そして、これを換言すれば「カリスマ支配の、伝統的支配への相転移」とも言い表せるだろう。

というのも、マックス・ウェーバーの『支配の社会学』を「色彩の寓意」のフィルターを通して眺めれば、紫は伝統的支配、赤と緑は合理的支配、黄色はカリスマ的支配に相当するからだ。

カリスマとは、その原意を紐解けば、目に見えない「神からの恩寵」を意味している。これがアルベド侵入と同じものであることは、第二福音書で既に述べてある。

そして、それを受容する主体が、自己の外部に対しても同じものを放出するとき、彼はカリスマ的人物と呼ばれることになる。

というのも、神からの恩寵（アルベド侵入）は奇跡を起こすからだ。キリスト教で言えば、イエスに限らず、さまざまな聖人たちが奇跡を起こしてきた。ペテロやパウロによる奇跡が、聖典や外典のなかで数多く紹介されている。

しかし、それが教会の教義へと翻訳されると、そこから自動的に「儀式」がつくられる。あるいはこれを「祭儀」「祭典」と言ってもいいかもしれない。いずれにせよ、この時点で、かつて現出した奇跡は、はやくも迷信じみたものになっている。

じっさい儀式とは、本性的に非合理なものである。さらに言えば、非合理であっても当然とされるもののなのである。

それだから、いくら辻褄が合わないことを言っても「それが伝統であるから」と言えば、それで十分に信者たちを納得させることが出来る。ここまでくれば、それは実質「迷信」以外の何物でもなからう。ゆえに、そこでは全く合理的でない、安易な理論（的なもの）が横行することになる。同時に、祭祀たちにとって都合のいい話も、容易にでっち上げられるようになる。

そして、時を経るごとに、これを強力な武器にした、祭祀（聖職者）たちの墮落が目立つようになる。事実、十四世紀ごろのカトリック教会などは、まことに「腐敗の極み」と言っていえばいいほどの倫理状態ま

で落ち込んでしまっていた。

合理性を求める気運

すると今度は「合理性によって、伝統支配を改革しよう」という運動が生まれてくる。ルターから始まる宗教改革が、まさにその典型である。

宗教改革者たちは、カトリックの聖職者たちに「合理的な道德性」を突き付けた。それにより教会から、迷信と腐敗とを払拭しようとした。

しかしながら、その途次にあつて、彼ら改革者の「合理性への傾倒」は、クリスチャンたちにおける「超理性的な奇跡に対する嗅覚」を、かなり鈍らせてしまった。すでにルターにもその気配があるが、カルヴァンになると、それが加速し徹底する。

そのため彼らの宗教（プロテスタント）はどんどん世俗的なものになっていった。と同時に、キリスト教に根源的に備わっていた「カリスマによる奇跡性」は半ば無視されるようになってしまった。

ヨーロッパで有名なことわざに「産湯と一緒に赤子も捨ててしまう」というのがあるが、ここでも産湯（迷信）と一緒に、赤子（本物の奇跡）までもが捨てられてしまったというわけだ。

かくしてプロテスタントは、墮落したカトリックと同じぐらい——方向性は異なるが——イエスの真実の教えから遠ざかってしまった。

こうなると私には、むしろ対抗宗教改革（要するに反省だ）を経たカトリック教会のほうが、まだしも、本来的なイエスの教えに近いような気がしてきちゃう。というのも、今なおカトリックには、種々様々な儀式が保存されているからだ。

迷信から奇跡へ

前項の最後に置いた言葉に「はて」と首を傾げる人も多かろう。

しかし儀式には、真実に至るための「機縁」としての機能は残っているのだ。それ自体は真実ではないが、真実を復元するための契機にはなる、ということだ。

すなわち今度は、儀式という非合理的なものに対して「紫から黄色へ」という方向性の相転移を促すわけである。下から上への相転移ということだ。

じつさい、儀式の非合理性を、座標5的な合理性によって洗い直し、そこにアルベド侵入による助勢を加味すれば、かつての「奇跡」は——少なくとも主体の心の中では——復元されるはずなのである。

たとえば「童貞生母を崇める」という非合理的な儀式を知らずして、人が「アルベドの霊的な母性原理」に辿りつくことは、非常に難しいことになると思う。

いや、難しいというよりは、まずもって不可能だと思う。それだと、思索や悟りの「種子」にあたるものが一切ないことになるからだ。およそ種がなければ、きっと葉も生えなからう。

しかし、彼が処女懐妊教義を知っていて、これを合理性によって否認しつつも——「だが、そこには大切な理念が隠されているのではないか？」と思索を続けるなら——彼は恩寵により、霊的な母性である「アルベド」と結びつくことが出来よう。

つまり、私が言いたいのは「迷信的な内容を、かの神的な領域まで昇華できるならば」ということである。あるいは、種から葉や茎を生やさせ、ついに花を咲かせられたら、ということである。

そのとき迷信は、奇跡へと劇的に変容する。そして、これこそ「紫から黄色へ」と反転する相転移現象の在り方であると言えるだろう。

第8章 白（座標9）

（1）総合された色彩

三原色を混ぜる

絵の具の三原色は、赤、青、黄である。これらの三色を混ぜれば、その混ぜ具合によって、すべての色相を得ることが出来る。もっとも、三原色の正式名称は、マゼンタ、シアン、イエローであるが、本書は色彩の専門書ではないので、より一般的な「赤、青、黄」の表記で十分であろう。

この「赤、青、黄」を同時に混ぜると、暗いグレーが生じる。これが白になると、以後の話がシンプルになるのだが、残念ながらそうはなってくれない。ゲーテも、すべての色を混ぜ合わせると灰色になると言っており、さらに、

「すべての色を混ぜ合わせると白になるというのはナンセンスであるが、これは他のナンセンスなことからとともにすでに一世紀にわたって信心深く、かつ実際の検証に反して繰り返されてきたのである」という辛辣な言葉を続けている。

しかしながら、グレーも白も、それが無彩色である点では、完全に一致している。

であるならば、グレー——言うまでもなく白と黒の混合色である——に含まれた黒の要素は、形而下あるいは此岸では決して逃れられない、立体を形成するための「陰影」であると考えるべきではないだろうか。

そして、そうであるならばだ。「理念としての色彩論」においては「三原色を混ぜ合わせたとき、形而上あるいは彼岸においては『白』という色を作りだす」というテーゼを措定してもよいと思うのである。アルペド（白化あるいは白）が、まさに形而上と形而下の接点において「門」の役割を果たしていることも、右の措定を励ますことになるだろう。

鼎を内包する対

ところで私は、これまで「紫、赤、緑、黄」という色相を取り上げてきた。そして同時に、そこに「紫・黄」「赤・緑」という補色関係があることを明言してきたのだ。もっともこれは、ゲーテに倣ったの明言ではあるのだが。

いずれにしても、これまでは一貫して「対」について語ってきたのに、本章では、その冒頭から、三原色という「鼎」の話となったわけだ。鼎とは、鼎談という言葉からも分かるとおり、三つの要素の横並びのことである。

しかし、ここには、ある秘密が隠されている。

というのも、一見すると対でしかない「補色」には、実は「鼎」が隠されているのである。

まず「紫・黄色」の補色関係であるが、これを分解して述べると「（青・赤）・黄」の鼎となる。そして「赤・緑」の補色関係は、これを分解して述べると「赤・（黄・青）」の鼎となるのである。

つまり紫は、青と赤の混色であり、緑は、黄色と青の混色なのである。

こうして補色関係は、また三原色の関係でもあるということが理解される。そして、ここから導出される結論は、補色関係にある二色を総合すると、三原色の総合と同様に、灰色または無彩色をもたらしということである。

ただし、本章では、あくまでも「理念的な」色彩論を語りたいと思っている。よって、これからは無彩色ではなく「補色関係にある二色を総合すると『白』に至る」というふうに表記することにしよう。

結合一致による第三の状態

そうすると、ゲーテの次の言葉が、私たちの心を捉えるようになる。

「相対立するものが相互に接近し、第三のものにおいて結合一致することを充分に考察したならば、これら二つの分離して相対立するものに一つの精神的意義を賦与できるのではないかという特殊な神秘的思想がきつと湧きおこってくるであろう」

ちょっと分かりづらいので、ゲーテの言葉を、ある程度整理させてもらおう。そうすると、おそらく次のような文章になりそうだ。

—— 対立する二つのものが接近し、第三の状態として結合一致する。この流れを、我々は充分に考察することにしてよう。

そうしてみると、今度はその流れを遡って「初めの状態」にも精神的意義を賦与できるようになるのではないだろうか。

つまり、分離対立している状態の二者関係にも、すでに精神的意義があると、我々は考えていいのではないか。そして、この考え自体を、ひとつの特殊な神秘的思想であると評しても良いのではあるまいか

これは彼の『色彩論』の中でも、かなり結びに近いところにある、それゆえ重要であることが明白な文章である。よって私たちは、これを充分に解きほぐして理解せねばならない。

そのために、さしあたってゲーテの文章を、二つの課題に分割してみることにしよう。

すると第一の課題は「対の結合一致による第三の状態の現出」への考察ということになる。そして、それを行った上で、

「結合一致の前にあった、分離対立するもの（＝補色関係）にも、精神的意義を賦与する」というのが、第二の課題となるだろう。

第三の状態の現出

では、まず第一の課題について私なりに語ろう。すなわち「対の結合一致による第三の状態の現出」についてだ。

まず先行手順として、三原色を結合させることで生じる、物理的なグレー、灰色を、理念的な「黒と白」に分離させる必要がある。その上で、さきに「黒」について語ろう。

そうしてみると『ヘルメスの杖』を引き合いに出すまでもなく、私は本書のはじめにおいて、黒という「混在的一者の象徴色」について考察している。

そもそも混在的一者とは、自分と他人が「混じりあう形で」一つになっている状態を指す言葉である。なканずく、母と子の「混在的な」結合一致、男女の「混在的な」結合一致を、その言葉の主要な内容としている。

そのうえで本書では、この二者（対Ⅱ補色同士）の混在的な結合一致によって「黒」という、第三の色が得られると言っているわけである。

そして、そうだとすれば「総合的に」一者性が結実するときには、そこに総合的一者（アルベドⅡ白）が現出して悪からうはずがない。なお総合的とは、結局「弁証法的に」と言い換えられるような結合法のことである。

要するにこれは「混在的に」補色同士が結合一致すると、黒が得られる。それに対して「総合的に」補色同士が結合一致すると、白が得られる、ということなのだ。

これが私なりの「対の結合一致による第三の状態の現出」についての考察ということになる。

（2）補色関係に対する精神的賦与Ⅰ

白に最も近い色

次に、第二の課題となる「結合一致の前にあった、分離対立するもの（Ⅱ補色関係）にも、精神的意義を賦与する」について考察してみよう。これに関しては、少し長めの叙述が必要となるので、ここでは節を改めることにした。

ではまず黄色という色から見ていきたい。

この黄色は、その純色の明度が非常に高いため、PCCSの中でも、かなり白に近いポジションにある。それを証明するように、たとえば、白地の紙に黄色で文字を書いたならば、これを読解することは、私たちにとり、大変に難しい課題になるだろう。そこでは背景と文字のあいだに、コントラスト（対比）がほとんど働かないからである。

それに比べて、これが黒地の紙に黄色であれば、それを読むさいの苦勞は、全くいらなくなる。そこには明確すぎるほどの「背景と文字とのあいだのコントラスト」が生じるからである。

これと同じように、黄色で象徴されたアルベド侵入もまた、その後期（座標8）ともなれば、ほとんどアルベド自体（座標9・白）と変わらないような様相を見せていることだろう。それを一言で言えば、その主体の生活や人格が、かなり霊的微妙なものになっているということである。

とはいえ、やはり「座標8」「座標9」の両者をして、これを同一であるとは言えない。そこには「侵入」と「自体」の一線を描く、何らかの決定的要因があるように思われるのだ。

そして、その決定的要因の「有力候補の一つ」として挙げられそうなのが、他ならぬ「紫」なのである。

紫との総合

というのも、アルベド自体（白）に到達するためには、やはり「三原色の総合」乃至「補色の総合」が必要だからである。

ゆえに黄色の場合は、その補色である紫を必要とする。むしろ紫は赤と青の混色なので「ここに三原色が揃えられようとしている」という言葉と同義にもなる。

では、黄色と紫が総合されるとは、具体的、寓意的に言って、どういうことなのだろうか。

紫によって寓意されるのは、とどのつまり、物質的な感覚生活であると言える。これをして「現実世界での自己実在感」と言い換えてもよい。

ところでユングは「現実感覚が希薄な状態で集合無意識に耽溺すると、そこから二度と出られなくなつて、主体の人格が破綻してしまうことがある」という警鐘を鳴らしている。

そしてアルベドとは、紛れもなく、この集合無意識の一部（ほとんど中核に近い）である。よってユングの警告は、アルベド自体の体験（＝神秘体験）の場合でも、そのまま適用できることになる。

そして寓意的に言えば、黄色と紫の総合とは、ユングのいう危険性の克服を意味しているのである。

紫の重要性

というのも、アルベド自体の体験は「この現実世界（紫）を良いものに変えていこう」という志を持った者にしか恵まれないからだ。

単なる霊的な世捨て人には恵まれないし、よしんば恵まれたとしても、彼には、その体験を有効活用することが出来ない。

たとえば、トルエンやLSDなどの薬物を使えば、アルベド自体の「疑似体験」を得ることは可能なのである。それはむしろ容易であると言ってもいい。

しかしながら問題は、それを得たところで、ここに何の意義が生じるのか、ということなのだ。彼には、その体験を社会貢献に結びつけることなど、まずもって不可能なのであるから。その体験は、自身自身の体をも、病的に蝕むものとなるのであるから。

アルベド自体の霊的な体験は、それを現実世界、現実社会に還元してこそ、その本当の意義がある。そ

して、そうであるならば、主体にはまず、アルベド体験をするまえに、現実世界において、ある程度の「生活の足場」を築く必要があるのである。

とはいえそれは、さすがに「盤石の足場」とまでは行かなくともいいだろう。そこまで言う并要求が過剰になる。人間にはどうしても、得手不得手というものがあるからだ。

だが、ある程度の現実的な足場は不可欠なのだ。具体的には、会社への帰属感でもいいし、家庭を大切にやる心でもいい。要するにそれは「健全な生活感覚」と言ってよいものであろう。

これを色彩的に言えば「そのとき彼は、少なからず紫族の因子を持っていなければならない」ということだ。

その条件を満たした上でこそ、彼は黄色の体験（アルベド侵入）を積み重ねるべきなのだ。そうしてさらに、黄色と紫の両者を総合させるべきなのである。そのときにこそ、アルベド自体（白）の本当の価値も現れてくることだろう。

かくしてこれが「黄色と紫という補色が総合されて白になる」ということなのである。

（3）補色関係に対する精神的賦与Ⅱ

赤と緑の総合による白

つぎに、赤と緑の総合について見てみよう。

こちらでも緑が、青と黄色の混合色であるので、そこに赤を加えると、絵の具の三原色がすべて揃うことになる。

そして、この赤と緑の総合について考えると、その行きつくところは、どうしても錬金術における「ヘルマプロディトス」の思想になっていく。

かかるヘルマプロディトスとは、ヘルメスとアフロディーテの子供とされる神である。この神は、豊かな乳房と陰茎を併せ持っていた。つまり「ふたなり」であり、男女が結合した肉体を持っていたということだ。

このエピソード自体はやや気味が悪いが、それでもこの寓話は重大な意味を持っている。というのも、これは「男性原理と女性原理が合成されて一つのものとなった」という形而上の総合的現象の寓話だからである。

それが形而上の総合であることを証するように、錬金術においては、ヘルマプロディトスは「王と王女の合体」としても描かれている。

それが王侯同士の合体として表現されるのは、錬金術師たちが「この結合は、俗界における安直な結合ではない」ということを主張したがつているからである。むしろ彼らは、反対に「これは、非常に高い

段階における、靈的な男女合成であるのだ」ということを主張したのである。

そして、これを色彩論的に語れば、当然「この混色は、形而下における黒やグレーをもたらすものではなく、形而上において白をもたらす混色なのである」という主張になるだろう。

政治家と芸術家

ここで「赤と緑」の補色関係について述べた第4章のことを振り返りたい。

してみると、赤は血の色であり、何らかの目的に向かって動き回る「動物的な活発さ」を寓意していると言える。そして、その方向性で最も先鋭化した者の姿が、男性の政治家や軍略家であった。

なお、以後いちいち「政治家と軍略家」と表記するのも煩瑣なので、ここでは一応「政治家」という言葉で、彼らの陣容をシンボル化させておく。もともと軍事は政治の一部であるから、この処置に無理はないだろう。

それに対して、緑は葉緑体の色であり、植物として大地一面、海中一面に満ち満ちる広汎性を寓意していると言える。そして、この植物たちは、静的でありながらも、つねに果実や野菜などを産出し、同時に、動物が動き回るための「環境」をも形成している。

第4章で語ったところによれば、これが人間の型として現れたものが「芸術的な生き方をする女性」であった。

だが、ここでは便宜上、彼女のような存在を、ただ「芸術家」と呼んでおくことにしよう。

かくして政治家と芸術家は「赤と緑」と同質の、運命的な相補関係を構成する。簡潔に言えば「芸術家が美を提示し、その美を現成させるために、政治家が働く」という図式を描くことになるのだ。

相補関係から総合へ

しかしながら、これは座標5における相互関係的なもの（＝二元的なもの）であり、座標9で「総合されて一つになっている」状態を表すものではない。

政治家と芸術家が総合されるとは、要するに、政治家的傾向と芸術家的傾向が、ある一人の人物のなかで同時に現れる、ということである。それは言わば、行動する芸術家の姿であり、内省的な政治家の姿である。

このような状態にある人物像に、無理やり職掌を与えるとすれば、おそらく「宗教家」ということになるだろう。

私の眼にそのような「宗教家」として映る人物としては、さしあたって、ユリウス・カエサルと、イエス・キリストとがいる。

まずカエサルだが、彼は『ガリア戦記』のような優れた文学をものにした芸術家でありつつ、ローマの政体を根本から変革した、天才的な政治家であった。そういえば彼はローマの宗教界におけるトップ

でもあった。

対するイエスは、まず何より優れた詩人であり、また寓話制作を得意とする文学青年であった。彼の美しい詩句やたとえ話は、雄弁にそのことを証明することだろう。

と同時にイエスは行動の人でもあった。その激烈な行動は、終局的に政治的な色合いを帯び、そのためにユダヤ人との軋轢ばかりでなく、ローマ軍による十字架刑を招くことになったのだった。そして、その十字架が、史上最大の宗教的奇跡の伏線となっていたわけである。

私はここに、赤と緑を総合した「宗教家」の典型を見る思いがする。

では、これにて「結合一致の前にあった、分離対立するもの（＝補色関係）にも、精神的意義を賦与する」という課題を果たしたものとしたい。

（4）白そのものの特性

すべての色相を共存させる力

最後に、白という色そのものの特性を考えてみよう。

すると、その最大の特性として「あらゆる色相の個性を殺すことなく、それらすべてを共存させるような背景となる」ということが挙げられる。

具体的に言うると、隙間なく複数の色相を配置すると、それらの色相は、境界の部分が滲んだようになる。その結果として、色相の違いの際立ちが減退し、画面から鮮やかな印象が失せてしまう。一言で言うて、どこことなく汚い画面になる。

といっても、これは視覚的に言っただと主張しているだけで、私には「どうしてそうなるか」までは説明することが出来ない。

もっとも、色相同士の境界が滲んでしまえば、その時点で、折角の「この色とこの色を、それぞれ有効に使いたかった」という、作者の試みが破綻しているのは間違いないだろう。

こうした問題が発生したときに、絵描きとしての「ではどうすればいいか」について、専門学校時代の教師が、私に次のように教えてくれた。

「その場合、異なった色と色のあいだに、白か黒を挟めばいいのです。そうすれば、各々の色相の発色がよくなり、色相同士の混乱もなくなります」

私は、この言葉を参考にして、当時の課題作品を制作したのだが、その結果は、まことに先生が言ったとおりだった。

先に黒のほうに触れるが、色相と色相のあいだに黒を挟めば、かつそれが太い線であれば、まるでステンドグラスのような画面になる。

そして、その線をどんどん細くしていけば、塗り絵のような画面か、もっと細ければ、ごく普通の「色付きの線描」となる。

それならば私には「ステンドグラス風」のほうが好ましいが、これだと画面が暗くなるのは致し方ない。加えて、そこには何か、色たちが厚い枠に閉じ込められているような閉塞感がある。

他方、色相と色相のあいだに白を挟み込むと、明るい画面のなかで、各色相が和気あいあいと共存しているような絵になる。

さらに、各色相の明度が高いと、その効果はさらに強まると言えるだろう。まるで白のなかを色たちが踊っているような画面、と言ったら当たっているだろうか。

すべての色を背負った白

これは、白という色が、潜在的にすべての色相を包摂しているから起こることだと思う。すべての色を背負っているので、何の苦もなく、すべての色を媒介してしまうのだ。そうやって各色相の個性を潰すことなく、これを穏やかに共生させるのである。

そう、白は黄色でもあるし、紫でもあるし、赤でもあるし、緑でもあるのだ。それだからこそ、あらゆる色に対し、ストレスを与えることなしに「自分以外の色と共存すること」を表現することが出来るのである。

むしろ、すべての色相は「白」の、その時々における自己表現だと言ってもいいのかもしれない。つまり極論すれば、結びつけるも何も、その色相のすべては、根源的に白であったのである。

このように考えていると、私はつい、愛の一元論を説いたイエス・キリストのことを思い出してしまう。世界のすべては愛で出来上がっており、それゆえ愛はすべてのものを結びつける。それが「神は愛である」と説いたイエスの、その最も重要なメッセージではなかっただろうか。

そして白という色は、紙やカンヴァスのなかで、そのイエスの説話のまつたき実践を行っているのである。

かくして全ての色相は、白のなかに総合的に配置されることで、その白のなかで安らぎ息づき憩う。

いや、すべての色が白の自己表現であると考えたならば、あらゆる色相（個性）は、大いなる愛の色（白）の中にあって、ことの初めから憩いつつ、かつまた自身の個性を発揮してもいたのである。

これは容易に汎神論へと結びつく考えであろう。愛の一元論を説けば、それはどうしても汎神論的な色合いを帯びることになるのである。

実際、イエスが説く神の実像は、創造神というよりは、はるかに汎神論的な神に近いのである。そして、その神はきつと白い姿をしていることだろう。

第9章

紫族のための宗教

(1) 紫族の判断力

迷信と真正の判断

本書の最終章として「紫族のための宗教」というテーマで話をしたい。そのために、まずは紫族が活躍する座標（座標2）に戻ることしよう。

この座標においては——ということとは「紫族の人々にとっては」と同義になるが——いわゆる「迷信」と「正しい宗教」は全くおなじように見える。

にわかには信じがたいかもしれないが、実際そうなのである。というのも、紫族の人々は、この二つを別個のものとして、弁別するための材料を持っていないからだ。

逆に、もし「迷信」と「正しい宗教」を弁別できるというのであれば、そのとき彼には「対象となる宗教を合理的に吟味する能力」と「本物の奇跡を感知する能力」が備わっていなければならない。

これら二つが備わっていない場合、必然的にすべての「宗教的なもの」は、まったく同じ高さのものとして見える。迷信も正しい宗教も、言っていることが非合理的なものである点では、まったく違いないからだ。

そのため現代、紫族の間では「唯物論」や「科学万能論」が幅を利かせることになるが、私に言わせれば、それらもまた立派な宗教的迷信である。いや、邪宗教という言葉さえ相応しいかもしれない。

そして、敢えてそれらに宗教としての固有名詞を付けるなら、きっと「マルクス教」というしゅうきょう宗教名になるだろう。

このマルクス教が不合理なことは、マクロ的視点に立ったときに、少しも経済的繁栄をもたらさない事からも明らかである。何しろ巨大な共産主義国家を、一つまるまる潰してしまったほどのだから。

さて改めて言うが、迷信も正しい宗教も、言っていることが非合理的なものである点では、まったく違いがない。本当の奇蹟も、迷信じみた儀式も、紫族にとっては、同等に「尊ぶべき非合理的なもの」である。

そうであるからこそ、たとえば「仏教、キリスト教、幸福の科学」のような正しい宗教ばかりでなく「統一教会、創価学会、オウム真理教、マルクス教」のような迷信（邪宗教）にも、それなりに人が集まるのである。

偶然の重要性

集まるとは、これを逆からいえば「そこへ引き寄せられる」ということである。

ではなぜ引き寄せられるかと言えば、第一の理由は、それが紫族の人々にとって「身近だから」であろう。具体的に言えば、親が信仰していたから、近所の人たちが皆信じているから、といった理由である。

そうであればこそ、紫族の手足（感覚器）が届く範囲に「正しい」宗教組織が、大きな占有率——あるいは、あって当たり前と感じられるほどの存在感——を持つていることが大変に重要なことになる。なぜならそれは、紫族の「偶々（たまたま）自分の身近に正しい宗教があった」という告白における、その「偶々」の発生確率を高めてくれるからだ。

そう、もとより紫族にとっては、正しい宗教に出会える機縁は、かかる「偶々」のほかはないのである。それが現実ならば「こうした紫族の人々を『迷信と邪教の災い』から引き離すためには、一体どうすればよいか」という設問には、すでに答えが出ていることになる。

そのためには必然的に「正しい宗教のほうに、その『出会える偶然』の発生確率を高め、紫族を自分たちの陣営に引き寄せる」という積極アプローチをするしかないのである。

迷信と正しい宗教の違い

ところで、色彩論的に言えば、迷信と正しい宗教の違いとは、どこにあるのだろうか。

まず言えることは「迷信は、紫の明度を超えることはない」ということだ。それに対して、正しい宗教は、たとえ紫を足場にしていても、必ずそれ以上の「高さ」を併せ持っている。

そして、その「高さ」は、かかる宗教に属した紫族の主体を、まず赤と緑の合理性（相補関係＝相互関係）に登らせるだろう。そしてさらには、彼を黄色の「カリスマ的人物との出会いや、奇跡の生起段階」にまで登らせることを可能にする。

少し言い換えると、正しい宗教もまた、紫の部分（儀式性、ドグマの非合理性）を持っているだろう。しかし正しい宗教は、必然的に、そこに留まらない「高度な教え」をも持ち合せている。そしてこの「高度な教え（合理性、奇跡）」の含みこそが、正しい宗教が、そのまさに正しいことの所以なのである。ここで話を戻すが、紫族の人々にとっては、そのような「正しい宗教」が自分の身近にあったとしても、それ自体は「単なる偶然」にすぎない。彼はべつに、吟味してそれを、身近に引き寄せたのではないからだ。

それは彼らにとって、飽くまでも、身近な環境として「もともとあったもの」なのである。ゆえにこれを、一種の「幸運の賜物」であったとも評せるだろう。

（2）黄色から始まる宗教史

黄色族に要求される努力

紫族の現実がこのようであればこそ、黄色族に求められる責務には果てしないものがある。むろん、その責務を要求するのは天意である。

まことにそうなのだ。つねに万民を愛する天は、紫族の未来のために、黄色族の努力（＝正しい宗教）が、きちんと紫族の世界にまで送り届けられることを望む。

そして、その望みの実現のための労力を、まず誰よりも——どの色相の族よりも——「黄色族の人間」に対して課すのである。よって黄色族は、そのカリスマ性や奇跡によって、この世界に宗教的な爪痕を残さなければならない。

だがそこで話が完結するわけではない。その次に天は、赤族や緑族の人々によって、黄色族のカリスマや奇跡が感知されること。そして、彼らがその感銘を胸に堅持しつつ、伝統的な共同体の中へと、積極的にそれを押し込むことを期待するのである。

元来カリスマとか奇跡というものは、どうしても紫族にとっては不可知なものとなる宿命にある。色相的に言って、紫には黄色の要素が含まれていないからだ。つまり彼らには、黄色へのシンパシーがないのである。

紫は、ただ青と赤だけによって構成される。黄色はその構成要素として必要とされない。というより、往々にして排除されてしまう。

そこで黄色を含んだ色相である緑（青＋黄）が、まずカリスマや奇跡といった黄色成分を、芸術作品等のなかに「美」として刻みこむ。そして、その芸術作品を、赤族が「同じ明度の相補関係」という形で、自らのうちに取り込むのである。

——いつの世にも芸術は、一般的意識のきたるべき方向転換を、直観によってあらかじめとらえるものなのであります。

ユング『現代人のたましい』高橋義孝訳より

赤族の強制力

赤族とは政治家や軍略家たちのことであり、彼らの一部を占めるエリート（元首や将軍）は、社会的に「絶対的な強制力」を持っている。

この強制力が、ついに伝統的な共同体に風穴を開けることになる。すなわち、彼らの介在によって、黄色族の「正しい宗教」が、なかば強制的に、伝統的社会に挿入される。そしてさらには、それがしっかりと、制度として固定化されるのである。

それはヘレニズムにおけるアレクサンダーのような、仏教におけるアショーク王のような、キリスト教におけるコンスタンティヌス帝のような力動性である。

アレクサンダーはギリシア文化（哲学）を中近東に広め、アショーク王は仏教を保護し、コンスタンティヌス帝はローマをキリスト教国家にした。

事実彼らは、社会的強者としての立場を利用して「正しい宗教」を、自国の領土のなかに、かなり無理やりに押し込んでいった。

そして、そのようにして圧入された宗教が、やがて社会制度化、習俗化し、紫族にとっての「身近なもの」になるのである。

そして、これが最終的には、紫族の未来に関する最大の福音ともなる——と、これが色彩論的に見た「黄、緑、赤、紫の宗教史」である。

不幸との妥結

むろん、黄色族のカリスマや奇跡は、その進展の途次で、紫族にとっての「儀式」や「非合理的なドグマ」へと墮してしまいうだろう。

だがそれでも、それは正しい宗教であるがゆえに、信者が、より高い精神段階に至るための可能性は内蔵しているのだ。それが第7章で語った「紫から黄色への相転移」である。

したがって私たちは、このあたりで妥協し「それでよからう」と納得するしかない。たとえば赤族の強制力によって、一時的に騒乱や混乱、民草たちの苦しみが発生しようとも、である。

アレクサンダー、アショールカ、コンスタンティヌス、この三人だけでも、彼らが殺害した人間や、塗炭の苦しみに合わせた人間は数知れないだろう。それは人類史における不幸な出来事である。

だが私は、その不幸に対して妥結を申し入れる。苦虫を噛み潰した顔で、それでも、この不幸に対して握手を求める。

だって考えてもみよ。オウム真理教や統一教会が、自分たちの国の国教となった世界を。その紫の明度（迷信）に留まった宗教世界を。想像してみれば、それはほとんど地獄の様相に見えるではないか。

——今さらながら私は、自分がイデアリストであつたら良かったのになと思う。理想を語るだけで満足できる人間であつたら良かったのになと思う。けれども私は、悲しいほどリアリストなのである。

たとえ読者に残念がられようとも、私は、本章のような現実的な世相を語らずにはいられないのである。

お
わ
り
に

白と黒をこえて

ゲーテの色彩論からPCCSへ

ヴォルフガング・フォン・ゲーテ——誰もが知っている、有名な文豪である。

だが他面において、彼は著名な自然科学者でもあった。たとえばゲーテが「間顎骨」という骨を発見したことは有名だ。

そして、自然科学者としてのゲーテが、最大の自信と愛着を持っていた著作こそが『色彩論』だった。これはもともと、ニュートンの『光学』への反論として書き始められたものである。しかし、科学的に見れば、その反論なるものは、稚拙で品がなく、とどのつまり、まったく価値のないものだった。つまり純科学的に見れば、ニュートンは正しく、ゲーテは間違っていたのである。

しかしながら、ゲーテの『色彩論』を、物理学の書ではなく、色彩心理学の書として見れば、それは恐ろしいほどの光芒を放つものとなる。

とくに現代は、色彩心理学が大いにもてはやされている時代だ。それは個人的な興味を満たす以外にも、企業や商品の「カラー・イメージ」を演出するツールとして、大活躍している。そして、その流れの源泉になっているものこそ、ゲーテの『色彩論』に他ならないのだ。

私もまた、東京デザイン学院という専門学校で、ゲーテの色彩論を淵源とする、色彩心理学を学んだ。そして、そのときに使った教科書である『色彩』という冊子に、プラクティカル・カラー・コーディング・システム（PCCS）の図版が載っていたのである。日本語では「心理補色色環」と訳されていた。

これは要するに、ゲーテの色彩論に「現代科学による検証」を付加して、科学的価値を高めたものである。

元来、ゲーテの色彩論の中心となるのは「二つの対照的な色が、互いを補いあう（＝補色）」というものだった。PCCSは、この補色理論を基盤としつつ、これを出来るだけ、科学的に精密化したものなのである。

換言すれば、PCCSとは、利子で膨らんだゲーテの遺産のようなものだと言えるかもしれない。

ただしゲーテ自身は「補色」という言い方を嫌っていた。私見であるが、ただ補い合うというよりは、むしろ「互いを高め合いながら一致する」というイメージが、ゲーテの胸中にはあったに違いない。

したがって、補色の代わりに「弁証」という言葉を使っていたなら、ゲーテは、ごくすんなりと、この言葉を受容していたような気がする。弁証とは、テーゼとアンチテーゼが、それこそ「互いを高め合いながら一致する」ことだからである。

ヘルメスの杖とのシンクロ

さて私は、この「心理補色色環」についてのイメージを、頭のどこに残しながら、二十代のときに「アルベド・シリーズ」の執筆を行った。座標1から座標8あたりまでの実態を文章化し、座標5までは『自己形成の過程』というタイトルで書籍化までしたのだった。ただし三十歳を過ぎてからの自費出版ではあったが。

その「アルベド・シリーズ」の執筆中であって、私の頭の中では、ヘルメスの杖のフォルムと、PCCSの図柄が、しだいにシンクロし始めた。つまりヘルメスの杖の「座標」と、PCCSの「色相」の印象が重なり合ってきたのである。

「少なくとも、座標1から座標9までは、PCCSと照らし合わせながら、その内容を説明することが出来る。しかも、その照合は、間違いなく有意義なものになる」

そう私は思ったのだった。

そのため三十代の初めに出版した『アルベド・自己形成の過程』には「シリーズの一書として『色彩の寓意』という本を出すつもりだ」という文言が載っている。

その文言を書いてから二十年以上が過ぎているが、今回、本腰を入れて、このテーマに取り組んでみた。そうして本書が成立した訳である。

ルベディアンとして

本書の大詰めとして、ここで大いに読者の注意を喚起しておきたいことがある。それは私の人格が、象徴的に「色相環の全体」を背負っているということである。

その「全体」のうちには当然「紫」も含まれている。本文中、あまり肯定的な評価を与えなかった紫族の在りかたであるが、それすらも間違いなく、私の人格の一部なのである。

より具合的に言えば、私もまた外向的な部分を持っており、物質的財産、名誉、流行などに、完全に背を向けている訳ではないということだ。

それでも純粋な紫族の人々と異なるのは、そこ（紫）に自己の関心を留めることなく、より明度の高い色相にも、つねに目を向けているということである。つまり赤や緑、黄色や白にも深く関わっているということだ。

私はルベディアンとして、闇から始まり発光で終わる「光のグラデーション」の全体を体現しない訳にはいかない。それが私の宿命である。私は黒より暗く、白よりも明るい存在なのである。

色彩の寓意 II

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
